

ヒトはいかに他者の環世界を想像するか Imagining the Umwelt of others

細馬 宏通

Hiromichi HOSOMA

早稲田大学文学学術院

Waseda University

hhosoma@waseda.jp

概要

ユクスキュルの提唱した環世界は、「生物によって内から生きられている世界」であり、ヒトは他者の環世界を、他者の行動とその他者を取り巻く環境とを手がかりに推測するより他ない。本発表では、ヒトどうしが他者の環世界を推測するときに生じる問題を、他者の指さしの対象を推測する実験によって例証し、他者の環世界に対して曖昧な認知しかもたない状態で、環世界内の対象を指し示すコミュニケーションをいかに行うかについて考察する。

キーワード：環世界、指さし

1. はじめに

本発表では、ユクスキュルの環世界論を、外界の対象を介してコミュニケーションを行う共同注意の問題と接続することを試みる。

ユクスキュルの提唱した環世界は、「生物によって内から生きられている世界」であり[1]、ヒトは他者の環世界を、他者の行動と他者を取り巻く環境とを手がかりに推測するより他ない。

ヒトどうしのやりとりの基盤の一つと考えられている「共同注意」は、ヒトの外界の対象をめぐる現象である点において、この環世界の問題と深く関わっている。他者が自己に何らかの対象に対して注意を促し、その結果、自己が同じ対象に注意を向け、他者と自己とが共同注意を達成する場合を考えよう。このとき、自己は他者の促している注意対象を推測する必要があるが、その注意対象は世界の中にぽつんと存在するのではなく、他者の環世界の中に分布するさまざまな対象のうちの一つであるに違いない。このとき、どの対象が妥当であるかを判断するために、自己は他者の環世界について、なにがしかの推測を行う必要がある。

しかし、わたしたちは、他者の環世界をうまく想像できているのだろうか。そして、環世界の中から、妥当な対象を選ぶことができているのだろうか。この問題を考えるために、本稿では、共同注意に関する簡単な実験を行い、その結果をもとに、ヒトは他者の環世界とどう関わりうるのかについて考察を行う。

2. 方法

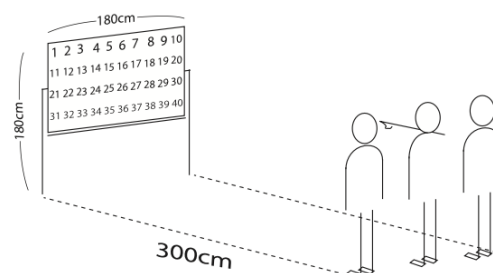


図1. 指さし対象推測実験。

共同注意の際にヒトが他者の指さし対象をどのように推測しているかを考えるために、次のような実験を行った。実験は3人1組の参加者5組（計15人）で行った。まず180×90cm、上端が180cmの高さに掲げられたホワイトボードを用意し、そこに1~40の数字を4列で等間隔に記した。次に、ホワイトボードから300cm離れた箇所から参加者の1人（指示者）が数字の一つに対して腕を伸ばし、人差し指で指さしを行った。指示者の左右90cmの位置に2人の別の参加者が立ち、指さされた対象である数字を推測した（図1）。2人を以下、左回答者、右回答者と呼ぶ。実験後、指示者は自分が指し示した数字を、左右の回答者は推測した数字を別々に紙に記入した。実験は1組につき3回行い、指示者、左回答者、右回答者の役割をその都度交替した。

試行後、参加者にブリーフィングを行い、指示者の利き目、指さしに使用した腕の左右を聞き取り、指さしの際の主観的な振り返りを行った。

3. 結果と考察

15人の指示者中、14人が右腕で、1人が左腕で指示を行った。指示者はいずれも腕をまっすぐ伸ばし人差し指によって指示を行った。指示者と回答者の答えが

指示者との上下 のずれ方向	回答者位置の左右	
	左回答者	右回答者
上	10	10
下	0	0
なし	5	5

表 1. 指さし対象推測実験における、左回答者、右回答者の上下のずれ方向。

指示者との左右 のずれ方向	回答者位置の左右	
	左回答者	右回答者
左	3	13
右	9	0
なし	3	2

表 2. 指さし対象推測実験における、左回答者、右回答者の左右のずれ方向。

一致したケースは、回答者の左右に依らず 0 だった。

次に、指示者と回答者の回答のずれ方向を上下および左右方向で総計した (表 1、2)。まず、上下方向については、回答者の左右によらず、回答が上方向にずれる傾向があり、下方向にずれた回答は 0 であった。一方、左右方向については、左回答者では右に、右回答者では左にずれる傾向があった。

指示者の指示と回答者の推測との間のずれがなぜ生じるのかを考えるために聞き取りを行ったところ、いずれの指示者も、指先と対象となる数字が重なるように指さしを行っていたことがわかった。この場合、指示者の指示する対象の位置 (図 2 A) は、指示者の指先や腕の延長方向にあたる位置 (図 2 B) とずれることが予想される。左右の回答者は、指示者の横から指さしを観察するため、回答者の位置によって指さしの左右方向の推測は影響を受けやすいが、上下方向の推測は影響を受けにくいと考えられる。図 2 のずれは、表 1 の指示者と回答者とのずれと一致している。

同様のずれは左右方向に対しても起こる。もし、指示者と回答者が共に、指の方向のみを手がかりに対象を指し示したとすれば、腕に近い回答者 (たとえば右腕で指示が行われた場合は右回答者) の方がより左右のずれの少ない回答を行うはずである。しかし 14 人の右腕指示者に対して、8 人の左回答者が右寄りの回答を行ったのに対し、13 人の右回答者が左に偏った回答を行った。このずれもまた、指示者が指先と視線の交わりを利用する一方で、回答者が指先のみを利用したと考える

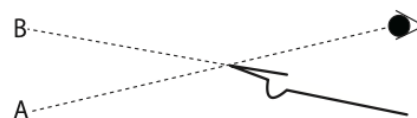


図 2. 指さしの対象が、指示者から観た指先と対象の重なる位置にある場合 (A) と、腕と指の方向を延長した位置にある場合 (B) との上下のずれ。

と説明がつく。

以上の実験から、指さしは日常生活で頻繁に用いられるにもかかわらず、指さしを行う者とそばでその方向を推測する者とは、指し示しの方向の解釈に違いが生じることがわかった。指さしの当事者は、指と視線の両方を用いて対象を指すのに対し、そばに居る者は、指の方向のみを用いる。このため、環境内に対象の候補が多数ある場合は、実験で観察されたように、多くの推測違いが発生する。

人が自身の環世界の対象を内側から指し示すときに、指と視線の両方を使うことは自明であり、誰もが体験していることである。にもかかわらず、他者の環世界を推測するときには、視線の効果は忘れ去られ、身体の動きとして顕在化された指の方向のみが推測の手がかりとされることが実験から明らかになった。

ヒトどうしの間に、指さしの推測についてこのような曖昧性が生じているにもかかわらず、わたしたちは指さしを用いて共同注意を行うことができるのはなぜか。考えられる理由の一つは、多くの場合で、指さしの対象候補がまばらに存在し、多少の誤差が問題とならないことであろう。もう一つは、共同注意は多くの場合、単一の指さしによって達成されるのではなく、同時に行われる発話や、それまでの文脈とともに行われるマルチモーダルな過程であることであろう。さらに、共同注意にはしばしば複数の発話やジェスチャーによるやり直しが伴う [2] ことも、理由の一つと考えられる。わたしたちは他者の環世界を不完全にしか想像できない代わりに、さまざまな手がかりを組み合わせて、想像によって生じる誤差を補い、共同注意を達成しているのだろう。

文献

- [1] 松嶋健 (2021) "ユクスキュルの「問い」と「方法」-円環と螺旋の自然学", 石井美保, 岩城卓二, 田中祐理子, 藤原辰史 (編著) "環世界の人文学", 人文書院, pp.37-59.
- [2] 細馬宏通 (2020) "再現行為とコ系指示語の「いま」性", 定延利之 (編) "発話の権利", ひつじ書房, pp. 81-107.